
【習作】風宮家【長編の為のスケッチ】

モジカキヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【習作】風宮家【長編の為のスケッチ】

【Nコード】

N9089V

【作者名】

モジカキヤ

【あらすじ】

風宮家二男、風宮総二郎は連日続く弟からのいたずらに心中穏やかではなかった。いよいよ堪忍袋の緒が切れた彼は、弟に対して仕返しを試みる。■長編に向けてのスケッチ短編です。単体でも楽しめます。

（前書き）

習作です。忌憚なきご意見をいただければ幸いです。

風宮総二郎は激怒した。必ず、かの邪智暴虐の弟を懲らしめねばならぬと決意した。

神倉町において、妖怪たちが恐れる三つの勢力の一角である風宮家は、風神の使いにして、神倉町を守護する一族である。総二郎はその四兄弟の二男に当たり、町の結界師たちを取り纏める仕事をしている。

現当主である長男の新太郎は、なるほど確かに当主にふさわしい切れ味のある才覚と、溢れんばかりの慈愛の精神を持っている。それは総二郎も認める所である。しかし、新太郎の弟を甘やかす癖だけは、総二郎の認められぬ所であった。

「しかし総二郎、幸四郎はまだ子供なのだから」

と兄は言うが俺はそうは思えぬ。四男幸四郎は純粹無垢なる子供の皮を被った邪悪の化身である。俺がそれを見抜いたからあいつは俺を陥れようとしているのだ。

総二郎は自らの訴えが聞き入れられぬ事に苛立ちを感じていた。

「えい、憎くて愛しい我が弟め、どうして懲らしめてくれよう！」

彼は自室でこぶしを握りしめ、グラスのウイスキーを一息に飲み干し、盛大にむせ返った。嘔き出したウイスキーが机に飛び散った。

「おのれおのれ、これと言うのも幸四郎のせいだ」

もはや何が起こつても弟のせいにしそうな総二郎を、その原因である幸四郎はドアの隙間から覗いていた。彼は怒り狂う次兄を見る

のが好きだった。

「総兄さんは面白いなあ。僕と遊んでくれるのは総二郎兄さんだけだよ」

幸四郎は心の中で呟き、くすくす笑いながら抜き足差し足で自分の部屋に戻った。

。

総二郎が怒り狂ったのは、一昨日の出来事が起因となっている。

その日、総二郎の着物がすべて桃色に染め上げられるという事件が起こった。

彼は大いに落胆したが、他に着る物がないので、仕方なしにその桃色の着物を着て仕事に赴いた。そんな桃色の彼を出迎えたのは部下たちの容赦ない嘲笑であった。

「総二郎さん、なんで桃色なんですか」

「ついに頭の中の色が外に漏れだしましたか」

「淫猥だなあ」

「死ねばいいのに」

彼は容赦の無い罵詈雑言をその身に受け、いたく傷ついた。

仮にも俺は結界師たちの取り纏め役である。つまりこ奴らの上司であるのに、こ奴らはなにゆえ俺を容赦なく罵倒するのであるう、と総二郎は憤った。部下の結界師たちは笑うだけであった。

笑っていたのは部下たちだけではない。弟である幸四郎もその様子を影ながらに見守り、面白い面白いとほくそ笑んでいたのである。

もちろん、総二郎の着物を桃色に染めた犯人も幸四郎であった。

自室に戻った幸四郎は、次はどうして総二郎に悪戯をしようかと思案した。

幸四郎の悪戯は多岐に渡る。総二郎の寢床にバツタを仕込んだ事もあるし、暇をしていたネズミたちに協力してもらって、総二郎の部屋の屋根裏で一晩中大騒ぎをやらせた事もあった。どの悪戯にも総二郎は顔を真つ赤にして怒ったが、幸四郎がやったという証拠は無かったので、いつもお咎めなしであった。

兄は三人いるけれど、幸四郎の悪戯にまともに反応してくれるのは総二郎兄だけだ。新太郎兄は何をしても笑って許してしまうので張り合いがないし、源三郎兄は病弱なので、あまり悪戯をして心労をかけるわけにはいかない。

幸四郎は次なる悪戯で、総二郎がどんな風に慌てふためくか想像し、にやにや笑いながら床に着いた。

○

翌日、雨の音で目を覚ました幸四郎が最初に見た物は、巨大な招き猫であった。部屋の扉の前に鎮座し、くりくりとした金色の目で幸四郎を睨みつけている。胸の前に支え持つ小判には「天誅」の二文字が彫り込んであった。

「……総兄さんの仕業かな」

幸四郎は兄の思わぬ反撃に多少驚きはしたものの、部屋の入口に招き猫を置くと言う反撃がなんだか微笑ましく思え、くすくす笑い

ながら招き猫に近づいた。

すると突然招き猫が鉄拳を振るい、幸四郎の頭にげんこつを落とした。目から火が出た。彼は突然の出来事に驚愕し、後ろに飛び退いた。じわじわと頭が痛くなり、目には思わず涙が浮かんた。

「ちくしょう総兄さんめ、乱暴な事をするな」

幸四郎は悪態をつき、この暴虐なる招き猫をどうやって撃退すべきか思案した。

しかし頭が痛くて考えが上手い事纏まらない。普段なら悪知恵がとめどなく溢れる頭脳も、招き猫の一撃によって正常に作動しなくなった。おまけに自らの意志とは関係なしに目からはじわじわと涙が溢れてくる。

幸四郎は頭を擦り擦りしながら畳の目を見つめ、それから招き猫へと視線を移し、涙をいっぱいに溜めた目で睨みつけた。

しかし幸四郎の憤りなど関係無いと言わんばかりに、招き猫は幸四郎を睨み返している。先程まで可愛く思っていた招き猫が、嫌に憎らしく感じた。

兄さん連中なら、何かしらの神通力を使って、招き猫程度撃退するのは容易い事であると思われたが、幸四郎はまだまだ修行不足であるので、大した力も使えない。もう一度鉄拳を食らうのも嫌だったので、幸四郎は自分で何とかすることを諦め、女中が来るのを待つ事にした。

その頃、総二郎は自らの反撃によって驚愕しているであろう弟を想像して、一人ほくそ笑んでいた。昨晚こつそりと幸四郎の部屋に招き猫を仕掛けてきたのである。

あれは普段は手のひらに乗る程度の大きさであるが、総二郎が術をかけると身の丈八尺にもなり、近づく者すべてに鉄拳を振るうと

いう物騒な兵器へと早変わりする。現に術者である総二郎も二三度殴られた事がある。

もちろん、殺傷能力があるだの、腕をへし折るだのといった位の威力は到底望めないが、幸四郎一人を震え上がらせるには十分である。慌てふためく幸四郎を想像し、総二郎は大人気なく顔を緩めた。

朝飯を運んできた総二郎付きの女中である水晶は、一人不気味に笑う主人を見て凍りついた。

声をかけるのも憚られたが、声をかけねば気付きそうもない。水晶は恐る恐る口を開いた。

「……旦那さま、朝食をお持ちしましたが……、どうかなされたのですか」

「む、いや、何でもない。……うむ。今日はいいい天気だ」

「旦那さま、本日は雨が降っておりますが……」

「……水晶、お前はいつも一言多いのだ」

「もっ、申し訳ありません」

水晶は慌てて主人に頭を下げた。総二郎は気を取り直したように立ち上がり、朝食の並べられた机の前に座り、いつものように給仕をしようとする水晶を手で制した。

「水晶、俺に着いていなくていいから、お前は幸四郎の所に行つてやれ」

突然の主人からの命令に、水晶は面食らった。

「幸四郎坊ちゃんの所ですか？ あちらは翡翠が居る筈ですが……」
「翡翠だけではちと辛い」

総二郎はそれだけ言つて、黙々と朝飯を食いはじめた。水晶は首を傾げながらも一礼して幸四郎の部屋へと向かった。

。

水晶は風宮家に仕え始めて二年目の女中である。技量はそこそこだが、何事も一生懸命に取り組む所が、非常に好感が持てる、というのが当主である新太郎の評だが、主人である総二郎は、「いつも一言多い」と彼女を評する。しかし、なんだかんだ言つて総二郎も彼女を気に入っているのが態度で丸分かりである。

水晶がぼてぼて歩いて行くと、廊下の向こうから杖をついて歩いてくる人物が居た。

「源三郎さま？」

「ああ、水晶さんか。お早う」

風宮の三男坊である源三郎は柔らかに笑った。

彼は病弱であり、あまり屋敷の外にも出ない。しかし柔和で人当たりが良く、誰からも好かれていた。また読書量が多く知識豊富である為、何かにつけて相談を受ける事が多い。当主の新太郎ですら彼のもとを訪れ、知恵を拝借する事が少なくない。

しかし、屋敷の中とは言え、源三郎が一人で出歩いているのはおかしかった。いかに調子が良くとも、突然具合が悪くなることもあるのだ。水晶は慌てて源三郎に駆け寄った。

「駄目ではありませんか、お一人で出歩かれては」

「ん、すまないね。どうも今日は調子が良くて歩きたい気分だったんだ。雨音が心地良くてね」

「まったく……、珊瑚さんが心配しますよ」

「うん……そうだね。珊瑚さんには気の毒な事をした、今頃きつと血眼になって僕を探しているだろうな。ちよつと軽率だったね」

源三郎は苦笑いを浮かべた。痩せた顔に相まってなんだか妙に弱弱しく見えた。その時廊下の向こうの方から、バタバタと慌てたような足音が聞こえてきた。

「坊っちゃん！ 源三郎坊っちゃん！」

「やあ、噂をすれば何とやらだね。おい珊瑚さん、僕はここだよー！」

源三郎が声を上げると、足音はだんだんと大きくなり、黒髪を束ねた妙齡の女性が大慌てで水晶たちの方に駆けてきた。

「ああ坊っちゃん、お一人で出歩かれてはいけないと、何度も言っただけではありませんか」

「ごめんよ珊瑚さん。でも水晶さんが居てくれたから大丈夫だよ」

水晶は珊瑚にぺこりと会釈した。珊瑚はホツとした様に表情を緩めた。

「ありがとう水晶……、坊ちゃんに何かあつたらもう私どうしていいか……」

「大げさだなあ、珊瑚さんは」

「坊っちゃん！」珊瑚は声を荒げた「大げさなもんですか！」

源三郎は、あははと笑った。そんな源三郎を見て、珊瑚はうんざりというように腰に手を当てて、ため息をついた。

「それじゃあ水晶、後は私がやりますから大丈夫ですよ。どうもありがとう」

「はい珊瑚さん。では源三郎さま、失礼します」

「うん、それじゃあ」

源三郎は珊瑚に付き添われながら、廊下の向こうへゆつくりと歩いて行った。水晶はその姿をしばらく見送った後、踵を返して幸四郎の部屋へと向かった。

。

幸四郎の部屋の前では、幸四郎付きの女中である翡翠が扉を相手に四苦八苦していた。中からは幸四郎の応援する声が聞こえる。水晶は眼前にて展開されるよく分からぬ状況に、思わずあつけにとられたが、ハツとして翡翠の方に駆け寄った。

「翡翠、どうしたの？」

「水晶？ あなたどうしてここに？」

「旦那さまからこちらに行くようにと言われたの」

「総二郎さまに？ まあいいわ。手伝ってくれない？」

翡翠は額の汗を拭った。

「いったい何が起こっているの？」水晶は首を傾げた。

「扉の向こうに何かが有って、扉が開かないのよ。幸四郎坊ちゃんが出られなくなってるの」もううんざりといった表情で翡翠は言った。

「中から開かないのかしら？」

「開かないから困ってるのよ。さあ、手伝って！」

二人は協力して扉を押した。中からは幸四郎の応援の声が絶え間なく響いている。微妙に涙声なので、どうものつびきならぬ状況であるようだ、と水晶は思った。

二人の苦心の甲斐もあって、扉の内側で何か重い物が床を擦る音が聞こえ、身を縮めれば、一人が通れるくらいの隙間が出来た。幸四郎くらいの大きさならば通る事にも苦勞しないだろう。しかし幸四郎が出てくる気配は無い。翡翠はイライラしながら声を張り上げた。

「坊っちゃん、いい加減になさい！ あんまり悪戯が過ぎますよ！」
「ちがうよ翡翠、招き猫が邪魔して出られないんだ！ 招き猫をなんとかしてよお！」

何が招き猫か、まったく要領を得ない。

翡翠はこの騒ぎを完全に幸四郎の悪戯だと決めてしまったようだった。しかし水晶はそうは思っていなかった。水晶に幸四郎のもとに行けと言ったのは総二郎である。

もしかして旦那様はこの事をすべて知っていたのではないかしら。水晶はそう考えた。となるとこの騒ぎも、幸四郎のただの悪戯であるという風には考えにくいのだ。

水晶は意を決して、扉の隙間から部屋への侵入を試みた。

「坊っちゃん、大丈夫ですか？」

「あつ！ 水晶危ないよ！」

幸四郎の叫びに水晶は咄嗟に頭を引いた。勢い余って尻餅をついてしまった。水晶の頭があつた所を招き猫の鉄拳が通り過ぎて行っ

た。水晶は身体から血の気が引いて行くのを感じた。翡翠が心配そうに彼女を見つめている。

「どうしたの水晶？ 矢張り坊っちゃんの悪戯？」

「違うの翡翠。招き猫が私をぶとうとしたの」

おそらく坊ちゃんもガツンとやられたに違いない。ああ、可哀想な幸四郎坊ちゃん！

水晶は思わず自らの肩を抱き、身震いした。翡翠は何が何やら分からんという表情である。

「招き猫？ あなたまでどうしたの」と、しゃがみ込んで水晶の背中をさすっている。

すると部屋の中から幸四郎が叫んだ。

「ねえ翡翠、総兄さんと呼んできておくれ！ 幸四郎は反省してます、って言えば分かるから！」

「はあ……、分かりました」

翡翠は頭にハテナマークを浮かべながら、早足で総二郎の部屋へと向かった。残された水晶はしばらく黙っていたが、やがてそつと口を開いた。

「幸四郎坊ちゃん、また旦那様に悪戯をなされたのですか？」

「うん、まさかこんな手痛い反撃を食らうとは思わなかったなあ……」

……

どうやらこの招き猫は総二郎の手の者らしい。水晶は自らの主人の見知らぬ一面を垣間見たような気がして、思わず身震いした。

しばらくしてから、総二郎が翡翠に連れられてやってきた。白々しいくらいに超然としている。

「幸四郎、俺に何ぞ用があるらしいな？」

「ちえっ、総兄さんは意地が悪いや」

「……ふん、どうやらまだ反省していないようだな。俺は散歩にでも行くでしょう」

「あっ、まって総兄さん、ごめんなさい！ 反省してますからこの招き猫をなんとかしてください、お願いします」

幸四郎の訴えを聞いて、総二郎はにやりと笑った。自らが勝利したのだ、と言わんばかりの笑みであった。翡翠と水晶はそんな総二郎の笑みを見て、「この人も大概子供だ」と内心想った。

「よかろう、これに懲りたら下らん悪戯など止める事だな」

総二郎が何事か唱えると、部屋内側の扉前に鎮座していた招き猫は、あっという間に手のひらに乗る程度まで小さくなり、押さえられていた扉はつつかえが取れ、ようやく開いた。

部屋の中では幸四郎が涙で顔をくしゃくしゃにしていた。部屋に入った総二郎は、小さくなって動かなくなった招き猫を拾い上げて懷に入れ、幸四郎を見て顎をさすった。

「幸四郎、なんだそのザマは。風宮の男子ならばそう易々と涙を見せるな」

「総二郎様、もう意地悪はおよしになって下さいな。幸四郎坊ちゃんも反省しておられるようですし」

翡翠が間に入ると、総二郎は「ふむ」と天井を見上げ、

「そつだな、俺とした事が少し大人気なかったようだ。幸四郎、たんこぶはちゃんと冷やしておくのだぞ」

と言って、水晶を連れて悠然と部屋を出て行った。努めて冷静に取り繕ってはいたが、廊下に出、幸四郎の部屋から離れると、総二郎はにやにや笑いを抑える事が出来なかった。

「……旦那さま、お顔が」

「むっ」

「ふふっ、旦那様も幸四郎坊ちゃんも子供ですねえ」

「……水晶、お前はいつも一言多いのだ」

「も、申し訳ございません」

水晶はぺこりと頭を下げた。

本日は総二郎の仕事は休みであるから、神倉町中ほどにある結果師の詰所へと出向く必要は無かった。彼は勝利の余韻をかみしめつつ部屋に戻った。

水晶は屋敷の掃除があるとかで、朝食の食器を持って出て行った。

総二郎は机の上に置いてあったやり残しの案件に目を通し、片づけられそうなものはささと片づけてしまった。彼は少し抜けている所こそあるが、決して無能というわけではない。

幸四郎を懲らしめた優越感も手伝って、仕事はすらすら進み、その時間をかけぬうちに終わった。

総二郎はお気に入りのスコッチ・ウイスキーの瓶を引き寄せ、グラスに注いだ。仕事終わりと幸四郎に対する勝利の祝杯である。

先程の幸四郎に対する勝利が再び彼の頭をめぐり、総二郎はニヤリと笑った。

「これでしばらく幸四郎もおとなしくなるだろう。ふふふ」

独り言を呟き、一息にグラスを呷った総二郎の顔からハタと笑みが消え、みるみるうちに赤くなつた。

「——っ！ おのれ幸四郎！」

総二郎は叫んだ。ウイスキーと思われたその中身は生ぬるい麦茶であつた。

（後書き）

読んでいただきありがとうございました。感想などいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9089v/>

【習作】風宮家【長編の為のスケッチ】

2011年10月8日11時48分発行